NO.333

ARCHITECT

2016. 6. JUN.

CONTENTS

熊本地震　日本列島の上の建築物の宿命をいかに …… 車戸慎夫 …… 2

東海とっておきガイド㊽ 三重編 …… 中西修一 …… 2

自作自演201 …… 清谷英広・岡田典久 …… 3

第6回　フランスと日本の関係～対外文化政策のいま～

テアトル・ドゥ・ベルヴィル　三重県に誕生した仏語名の民間小劇場 …… 松本茂章 …… 4

インタビュー　車戸慎夫　新東海支部長に聞く …… 6

2016年度JIA東海支部・地域会役員構成 …… 8

速報! 第23回JIA東海学生卒業設計コンクール2016　公開1次審査結果 … 吉川法人 ……10

地域会だより ……10

地域が建築に求めるもの1

建築のプロセスを論じる対話型レクチャーイベントを行っていきます! …… 吉村昭範 ……11

会員のステージ

旅の大学「ピレネーを越えてⅡ」／カルカソンヌ、アンドラ公国、カタルニアのロマネスク

髙橋敏郎・服部　滋・鈴木幸治 ……12

東北からのメッセージ

―東日本大震災復興建築ツアーinみやぎ―に参加してきました……吉元　学 … 13

東海支部役員会報告……高嶋繁男 … 14

保存情報 第175回

旧大倉別荘離れ＋表門（現・大倉公園休憩棟＋茅葺門）……三井富雄 … 15

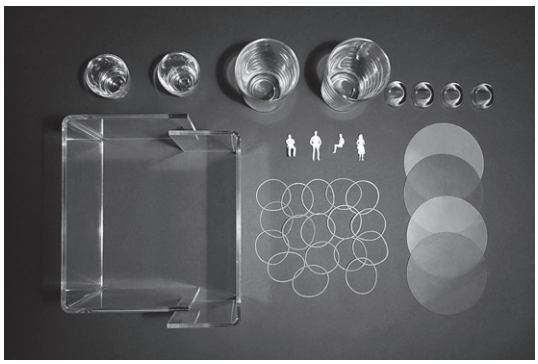
モダニズム建築としての名古屋城天守閣……谷口　元 … 15

編集後記…… 中澤賢一・宇野　亨 … 16

スケールと幻想 3

牧ヒデアキ
makira DESIGN

建築にとって採光上の理由から必要不可欠な透明素材は、家庭用品においても多く使われています。そこで今回は透明素材（ガラス・アクリル）を中心に組み立てました。コの字型のアクリル仕切棚にゴムバンド（俗称：輪ゴム）を渡し、テンションをかけて屋根部分の架構とし、コースターで部分的に屋根をかけました。透明素材は反射しますので背景紙を黒色にしてバランスをとりながら調整していましたら、何だか少し華やかな空間が出来上がったような……。材料に導かれるように組み立てていましたら、このような空間になりました。透明性を多用する空間は、どちらかといえばプライベートな空間よりもパブリックな空間の方がふさわしいような気がしました。



◉ 今回使用した家庭用品

・ショットグラス　φ29～48×57｜2個
・グラス　φ51～68×100｜2個　　・箸置き　34×28×11｜4個
・アクリル仕切棚｜188×138×120×t5　188×138×70×t5
・ゴムバンド No.16 φ40｜17個　　・コースター　φ100｜4枚
・1/50 人物模型｜4体

日本列島の上の建築物の宿命をいかに

東海支部長・本部理事　車戸慎夫

今回の「熊本地震」で被災された皆さまに御見舞い申し上げます。

地震に限らず、いかなる災害でも、救助・救援・復旧・復興とそれぞれの段階で、国・県・地方自治体によるスムーズな支援体制と、その予算措置が計られなければなりません。阪神淡路大震災や先の東日本大震災の経験から、諸官庁のみならず、民間のボランティアなど災害に促した団体の活動も組織・運営化され、被災地・被災者の現状復旧にその力が活かされています。

特に、震災にあたっては、われわれ建築関係の諸団体の存在意義・価値が問われるところです。復旧から復興までの被災者の長く続く生活苦を思うとき、われわれの日常生活の設計活動の中に、非日常的生活を強いられている被災者への、不断のサポートのための仕組み作りが必要となってくるのでしょう。現在の応急危険度判定士・災害予防の活動も含め、各種団体とのネットワーク化と情報共有が計れればと思っています。

一方、日本列島は4つのプレート上に、そして火山帯の上で成立しています。つまり日本の地形は火山に囲まれ、地震に襲われ、土地が隆起・沈降して形づくられたもので、その結果として自然の脅威と共に多くの自然の恵みを受けながら、その独特の文化・風土がつくられてきたとも言えるでしょう。

私たちは敢えて、そのような文化・風土の上に建物（そして原発も）をつくっているわけで、この「敢えて」の部分の認識を今一度確認し、災害への対応、ひいては「建築」そのもののあり様を捉え直す必要があるのではないでしょうか。それは、伝統の伝承のあり方、日本の風土と建築、「かた」の文化など、高度に発達した現代文明社会の中での、文化としての建築を視野に入れた「建築のあり方」であり、究極は建築の生産・建設のシステムにまで関わる問題で、今後「建築像」の転換にも関わってくるでしょう。

東海とっておきガイド㊽ | 三重編 |

中西修一（shu 建築設計事務所）

真言宗山階派 丹生山「近長谷寺」

近長谷寺と書いて「きんちょうこくじ」と読みます。長谷の城山に建つ同寺は伊勢自動車道勢和多気ICから5kmほどで、車で行けるのですが通り抜けのできない山道の突き当りにひっそりと建っています。お寺の由来は割愛しますが、現存するする本堂は元禄7（1694）年に再建されており300年以上も前の建物です。本尊の木造十一面観音立像は平安後期につくられたもので国の重要文化財に指定されている由緒あるお寺です。本堂と庫裏を結ぶ廊下がその土壁と相まってまたなんとも味があります。いつでも拝観できるというわけではありませんが、ぜひとも見ていただきたい建築です。なお、山の北側からアプローチするとお寺にたどり着けないのでご注意を。

所在地：
三重県多気郡多気町
長谷202
拝観：
日・祭日の10時頃～
概ね15時頃、
毎月18日は開帳
拝観料：200円

お気に入りの喫茶店「マーチ」

私が勤め人の時代、ランチに足繁く通ったとっておきの喫茶店をご紹介します。近鉄宇治山田駅の裏手にあり、カウンターと4人掛けテーブル1卓のこじんまりしたお店ですが何しろ居心地が良くて落ち着きます。営業してもう30年以上との事ですが笑顔の素敵なママさんは健在で看板メニューは日替りランチ。メインはハンバーグ、塩サバ、から揚げ、エビフライなどから1品選べるので続けて通っても飽きません。他におかず5～6品と味噌汁がついてなんと税込600円。私のお気に入りはハンバーグで目玉焼きがのっていてとても美味しいです。いつも変わらぬ姿で居てくれるこの喫茶店はまるで故郷のようです。伊勢にお越しの際はちょっと覗いてみて下さい。

所在地：三重県伊勢市岩淵2-1-11
電　話：0596-23-6371
営業時間：11～17：30
定休日：日・祭日

自作自演㉑

清谷　英広（JIA愛知）

中日設計（名古屋市東区筒井2-10-45　TEL 052-937-6711　FAX 052-937-6881）

再チャレンジ

「再チャレンジ」という言葉は、第一次安倍内閣のスローガンとして使われたのがきっかけのようです。当時（もう１０年程前になります）は就職氷河期の若者が就業で苦労して非正規雇用などが社会問題となり、この問題は現在も継続しています。その後、安倍総理自身も「再チャレンジ」で復帰し、東日本大震災の復興や少子化などの社会情勢変化もあり、最近ではむしろ「人手不足」がクローズアップされています。

設計事務所であるわが社においてもこの影響を実感していて、魅力的な職場づくり、社員満足と顧客満足をどのようにして両立するかが今後の最重要課題だと考えています。

「再チャレンジ」といえば、最近のスポーツ選手の不祥事を耳にするたびに今後この選手はどうなるのだろうと心配になります。飛び抜けた才能を持つ選手達は、特別な存在であるがために社会の模範たる姿勢が必要になりますが、若さゆえの暴走も見受けられます。私も大学では体育会に所属し、先輩後輩の関係や、大部分の時間を競技に費やしているために人間関係も限られて世間知らずになりやすいことはよく分かります。何とか再起の機会が与えられないものかと願っています。

自分にも「再チャレンジ」が訪れています。長男が少年野球を始めたことで久しぶりにコーチとしてささやかながら野球にかかわることになりました。それをきっかけに昨年からは草野球まで始め、チーム最高齢の新人としてプレイを楽しんでいます。ときには帰宅後に学生時代の「篠塚モデル」バットを持ち出して素振りをしますが、夜間にバットを持つ中年男は如何にも不気味なので、必ず中学生になった長男と一緒に振ることにしています。

岡田　典久（JIA岐阜）

パトス建築設計室（岐阜市長良福光2458-11 ふるふる館 1階　TEL 058-233-3665　FAX 058-233-6734）

黄山・宏村・西逓

宏村の古民居群

西逓の石畳の路地

上海から西へ新幹線で5時間の安徽省黄山市（温泉区）、さらに車で2時間ほど山奥の500～600年前の明・清朝時代の山岳古民居群、宏村・西逓を訪れる機会を得た。

黄山はかの有名な山水画で山岳景観を誇り1990年ユネスコ文化遺産及び自然遺産に指定された名跡で、宏村・西逓の各農村も2000年に世界遺産に指定された往時の素朴な農村風景を今に伝える貴重な山岳古民居群である。都会の空気汚染に辟易した旅行者の目にはいずれも新鮮で、美濃の郡上や飛騨古川を彷彿とさせる豊かな新緑と清水に恵まれた桃源郷のような山紫水明の古代農村集落にひと時たたずんだ。

レンガに漆喰を塗った白壁と黒瓦のコントラストがリズミカルな馬頭壁（うだつ）の配置で特徴づけられた住居はいずれも立派な門構えで、作業空間を兼ねる中庭には祖先を崇める祠堂を祀った大邸宅が多い。宏村はかって塩の専売権を得て財を成した一族の末裔が数多く居住し、住人の8割は汪氏姓を占めているそうだ。西逓の集落は胡氏一族の居住地で明清時代の生活様式を今に残す民家博物館ともいわれている。入り口付近の“胡分光勅使牌楼”は当時のままで120棟ほどの民家と、3棟の祠が今なお良く整備され残っている。

家の周りには歴史を刻む厚い石畳が張られた路地が、牛の腸を模ったとされる豊かな水路と並走して配置され、村民の貴重な生活用水としてさまざま利用されている。路地端の店先では特産の硯石や墨・筆をあつかう土産物店も多く、筍・きのこ・ぜんまいなどの農作物を器用に皮むきしながら小娘たちが観光客に声をかけるともなく素朴な笑みを投げていた。

テアトル・ドゥ・ベルヴィル
三重県に誕生した仏語名の民間小劇場

松本茂章 | 公立大学法人 静岡文化芸術大学文化政策学部教授

「美しいまち」という名前

広さ10メートル四方。天井の高さ4・5－6メートル。客数は50から70程度。こんな小さな劇場が三重県津市の美里町に誕生したことはそれほど知られていない。市中心部から車で20分ぐらいの山あいにある。2014年11月23、24、30の3日間にこけら落とし公演「シンデレラ」が上演され、地元住民らは無料招待された。高齢の女性は「数10年ぶりにお芝居を見た」と感動した。津市長の前葉泰幸も関心を抱いて駆けつけ、終演後のアフタートークに登場した。劇場名は「テアトル・ドゥ・ベルヴィル」という。Bellevilleとは仏語で「美しいまち」という意味だ。美里町という住所と、後述するパリ20区に寄せて命名された。元資材倉庫の建物は、NPO法人パフォーミングアーツネットワークみえ（通称ぱんみえ）が所有者から有償で借りている。同じように同NPO法人が自主運営する民間小劇場が、このほか同市内に2つある。ベルヴィルの場合は、東京から移転した劇団「第七劇場」が実際の管理を担当して、レジデントカンパニーとして活動しながら、同NPO法人に家賃や水道代と同額の金額を支払っている。

改装のための材料費やごみ処分費は約100万円。劇団の自己資金40万円のほか、残りは全国から寄付を募った。寄付をしてくれた人々の名前は木札に書いて劇場入り口に掲げ、感謝の気持ちを表現した。壁を黒く塗ったり床面をつくったりする作業は地元の人たちが手伝ってくれた。同NPO法人関係者には、劇場づくりの作業に加えて、倉庫に残っていた廃棄物の撤去などを引き受けてもらった。

東京から劇団が移転して

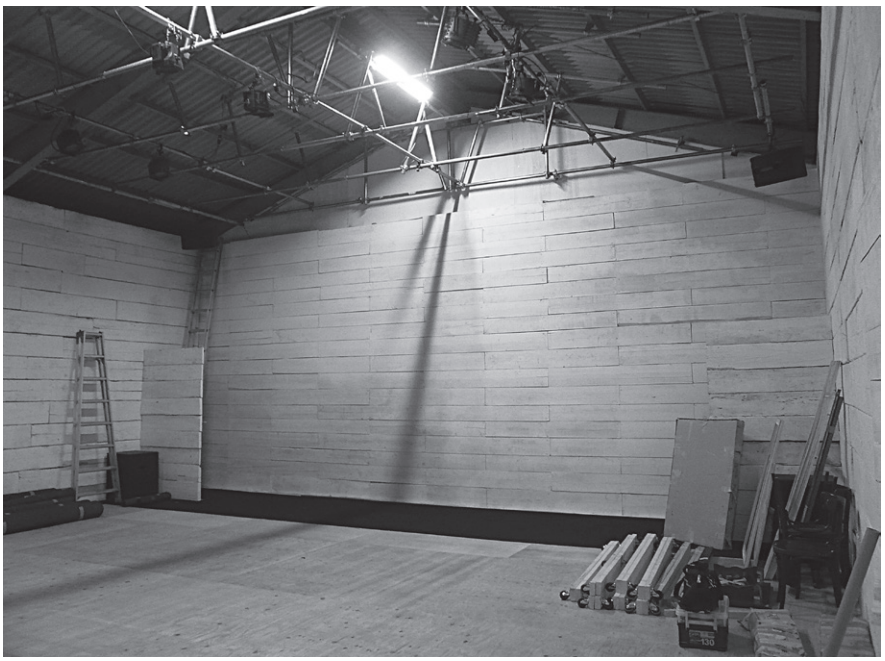
第七劇場の主宰者、鳴海康平は、あごひげを20センチ程度伸ばして「野武士」のような風貌である。1979年、北海道紋別市に生まれた。医師を目指していたが、高校3年の数Ⅲでつまずき理科系から文化系に。映画好きだったので「監督になりたい」と夢見て早稲田大学第一文学部演劇映像専修に進学した。在学中に劇団「egg flip」を結成し、2003年に第七劇場と改名した。同年、富山県利賀村の演出家コンクールに参加したところ、著名な鈴木忠志（劇団SCOT主宰）の影響を受けて「自分たちのアトリエを持ちたい」と願うようになった。「鈴木忠志さんから学んだことの1つは上演空間と一緒に作品をつくること。演劇人は自分の城を持つ必要があるという考え方に強く影響を受けた」。2006年、埼京線・板橋駅近くの物件を借り、別の劇団とシェアした。月額16万円を2劇団で折半した。都内にアトリエを持てたが、一方で、魅力的な上演空間を求めて地方公演に出向くようになった。「東京はコストが高く、消費のサイクルも早い。東京にこだわる必要もない」と思い始めた。

白い壁に取り付けられた赤い看板が印象的なテアトル・ドゥ・ベルヴィル

三重県内で公演したのを機に同県内の演劇関係者との交流も生まれた。県文化会館を運営する県文化振興事業団の事業課長（当時は事業推進グループリーダー）松浦茂之（1968年生まれ）、民間小劇場「津あけぼの座」などを運営する同NPO法人代表理事の油田晃（1973年生まれ）、同NPO法人副代表理事の山中秀一（1973年生まれ）らと知り合った。舞台芸術にかける熱っぽさと官民で協働しようとする姿勢に感銘を受けた。2011年のある日、津駅近くの焼き肉店で食事していた際、「三重に引っ越したい」と決意を表明した。

演劇漬けのパリ生活

ポーラ美術振興財団に申請していた鳴海のパリ留学が幸いにして認められ、2012年10月から2013年9月まで渡仏した。演出にとどまらず、舞台美術も自らデザインしてきた実績が評価されたのだった。当初はサクレクール寺院そばで暮らし、その後郊外に転居した。郊外都市の1つヴィトリにある公設小劇場「ステュディオ・テアトル・ヴィトリ」の芸術監督で演出家ダニエル・ジャンヌ



上｜鳴海康平さん（2016年1月4日、松本茂章撮影）
左｜テアトル・ドゥ・ベルヴィルの内部（2016年1月4日、松本茂章撮影）

トーの面識を得て同劇場で研修することになった。同劇場では若手演劇人を支援しており、彼らはここで作品を制作してから他の劇場での上演を試みた。国や自治体からの補助金を得ていた。近年、仏国ではパリへの文化一極集中を防ぐため、地方やパリ郊外の文化施設・団体への支援を強めている。鳴海は、同劇場での研修のほか、南仏のアビニョン演劇祭を含めて留学中の1年間で計320本の演劇作品を見た。

初めてパリで公演したのは2011年3月だった。仏人から先に紹介されていた天理日仏文化協会の文化施設ベルタン・ポワレ文化スペース（本連載4回目参照）で、チェーホフ作「かもめ」（鳴海演出）を2ステージ上演した。「観客約100人は仏人ばかりで、日本語のせりふに仏語の字幕をつけた」。その際、パリ東端20区にあるベルヴィルの安宿に泊まった。ベルヴィルは中国系やアフリカ系の移民らが集まり、漢字が看板にあふれていた。実にエスニックで活気ある地区である。このときの好印象が三重に設けた新劇場の名前につながった。

三重移住の希望は、鳴海が日本にいない間、親しくなった油田が代行して県内の物件を探してくれていた。鳴海は帰国後、本当に移住を実行する。「フランスでは、劇場がどんなに地域に役立っているか、を思い知った。観客たちは劇場の関係者を『自分たちの人生を豊かにしてくれるもの』としてとらえていた。地域社会と劇場の関係を見つめ直した」と語る。そして「フランスでの経験を活かせる劇場をつくりたい」と願うようになった。

可能性を秘めて

第七劇場に在籍するのは鳴海に加えて俳優7人である。うち30代の男性団員2人は鳴海とともに東京から移住してきた。当初は3人で近くの一軒家を借りて暮らした。日々の生計はどうなっているのか？　鳴海の話によると、県文化会館が催す県内高校演劇部員対象の講習会で指導したり、同劇場の地元・美里地域の子ども劇団の演出の仕事を引き受けたりする。三重大学では授業「演劇入門」の非常勤講師に任命された。テレビ局が発注する制作会社の映像編集も手伝う。「何とか生活できている」と鳴海は笑顔で語った。

第七劇場は県文化会館の準フランチャイズ劇団に選ばれた。年1本の新作をつくるために約100万円の予算が計上された。2015年度に制作した作品「アリス・イン・ワンダーランド」は地元のほか大垣と広島の公演を実現できた。三重からの全国発信につながった。

ベルヴィルの客席は3段だけだが、舞台は奥行7・2メートル、横幅9・6メートルと本格的だ。「このサイズなら全国の文化施設のホールにも対応しやすい」と胸を張る。何より劇場のある津市は地理的条件に恵まれている。日本列島の中央部にあるうえ、対岸にある中部国際空港から船便に乗れば津市まで45分である。さらに劇場から伊勢自動車道のインターチェンジまでは車で10分と近い。ベルヴィルで舞台を組み、本番同様の稽古（ゲネプロ）に励んだあと、全国各地、いや海外にまで巡回興行できる。

鳴海は「劇場のことをもっと広く知ってもらい、良質なプログラムを続けて、少しずつ観客を増やしたい」と静かに話す。同NPO法人運営の小劇場3カ所いずれの芸術監督を無報酬で引き受けた。県文化会館とも連携しながら新たな展開を考えている。「地方創生」が叫ばれるなか、見守りたい文化的な動きの1つである。（敬称略）

まつもと・しげあき
早稲田大学教育学部卒、同志社大学大学院総合政策科学研究科博士課程（後期課程）修了。博士（政策科学）。読売新聞記者、支局長を経て2006年4月から県立高知女子大学教授（現、高知県立大学）。2011年4月から現職。日本アートマネジメント学会会長、日本文化政策学会理事、NPO法人世界劇場会議名古屋理事。単著に『芸術創造拠点と自治体文化政策　京都芸術センターの試み』（2006）、『官民協働の文化政策　人材・資金・場』（2011）、『日本の文化施設を歩く　官民協働のまちづくり』（2015）（いずれも水曜社）。

東海支部としての地方創生

支部と地域会の関係をよりスムーズに活性化

車戸愼夫 新支部長に聞く

新支部長に、岐阜地域会の車戸愼夫さん（株式会社 車戸建築事務所 代表取締役社長）が就任されました。公益社団法人となって3年、社会とJIAの関係、財政の健全化、会員増強と課題の多い中、お話をお聞きしました。

――この度JIA東海支部長就任に当たり、時折お話されている地方創生についてお聞かせください。

私は東海四県で唯一海のない、岐阜県の西端の陽没するまち大垣で、設計事務所を40年余営んできました。岐阜県の西端といっても、実は名古屋までは、JRで30分そこそこと、比較的名古屋圏には近いんです。30年ほど前までは、西濃の中核都市と言われて、それなりに個性ある地方都市の面影を残していたのですが、最近は名古屋駅周辺の魅力的な都市環境の影響に押され気味で、なんとなく名古屋の衛星都市のような気がします。大垣は戸田公十万石の城下町として栄えてきたのですが、城のある城郭地区の中心市街地も、すっかりシャッター街となってしまっています。日本の国土の健全な発展には、都市ばかりでなく、特色ある地方都市が、その地の歴史・文化・風土を守りつつ共に発展してゆくことだと思っています。そのためにも、名古屋が周辺の県市町のゲートウェー機能を果たして欲しいと思っています。

――東海支部事業についてお聞かせください。

基本的には今までの支部長が努力し、続けられてきた諸事業を継続してゆくつもりです。ただ、事業立ち上げのときの趣旨やその役割が、時間の経過と共に変わってきているものもあるでしょう。費用対効果も考えながら、事業の意味・価値を見直してゆくことが、私の責任かなと思っています。

――卒業設計コンクールも同種の全国的な催しが増えて、当初と状況が変わってきていると思います。この先どういう展開をしていくのかが重要な気がします。

私は、大垣で商工会議所活動をお手伝いさせていただいております。JRなどで大垣のイベントの広報を目にしているのではないでしょうか。最初の企画と運営費つまり補助金ですね、それは出しますが、毎年補助金を出し続けることは無理ですので、商店街の方々には、数年後は自分達のイベントとして自立して運営して下さいとお願いしています。われわれは少しずつフェイドアウトするようにしています。

――きっかけと道筋をつくるということですね。

そうです。ただどんな事業でも、立ち上げるときには苦労もし、エネルギーも使っています。かかわった人々は、それがいい思い出として記憶の中に残っていますから、事業を否定されることはいい気がしないのも確かです。止めるときのタイミングは難しいものです。その理由付けと受け皿を用意しつつ、バトンタッチをしていくことも大切でしょう。

――時代とのマッチングといいますか、調整といいますか、どこかで判断が必要なことがあるような気がします。

■■■

――財政についてはどうでしょうか。

各種団体に所属し、その運営にも携わってきましたが、固定費の占める割合ばかりが大きくなり、肝心の事業費が十分に捻出できなくなってきています。また、その時々の団体長の社会的地位やその人のネットワーク力によって、協賛金などの収入に差が出てきてしまいます。本来、健全な組織とは、その所属している人の属性、JIAならば地域・年齢・男女・所属事務所の形態の如何にかかわらず、誰もが支部長や役員を無理なく運営できる、財政のシステムを確立していかなければならないでしょうね。その意味でも事業のあり様は検討すべきですね。

――そのあたりのお話というのはおそらく会員増強や建築家制度そのあたりの話ともつながってくるお話だと思います。JIAがより確かなものなれば、自然に求心力ができていき…というのが理想であると思うのですが…

先ほども言いましたが、固定費が削減され事業費に回すことは大切ですね。そして対外的な啓蒙活動も大切ですが、JIA東海の会員相互が情報交換しつつ、スキルを高め合い、ネットワークを組んで、自分の仕事のポテンシャルが高まるような活動を行い、それを広報してゆく、そのために事業費が使われていけば、会員増強、拡大にもつながるでしょうし、「建築家」の概念も社会に正しく伝わっていくでしょう。「卵とにわとり」的な話になりますが。

――組織としての体面を保ちつつ、結局は事業に立ち返っていかないといけないという気がします。

私の事務所から独立した旧所員が、それなりの人数、頑張って設計活動をして

います。彼らの多くは民間の仕事しかしていません。すると、入札制度や発注方式といったことにあまり興味を示さず、JIAにも入会しません。しかしながら、彼らは数人が集まり「土壁」の研究会や、見学会を行っています。出し合ったお金がそのまま、自分に直接全て返ってくるわけで、彼らにはなかなかJIA活動の価値が伝わらない。建築行為は極めて社会的行為であると言っているのですがね。とりあえず、入会以前に、とにかく事業に参加してもらうことから始めるしかないと思っています。

――そういう部分でJIAとして話を出すことで社会的に話が通じていきやすい可能性があるのであれば、Win・Winの関係を保ちつつ協同していただけたらという気がします。

とりあえずネットワークの中に入ってもらい、やがてシンクロ化へ進めば、JIAの魅力が分かってもらえるし、われわれもその努力をしなければならない。

――予感を感じなかったら入会する気にもならないという方もいらっしゃると思います。

それは会員の日頃の設計活動への態度によると思いますよ。社会が認めた「建築家」であれば、それなりの力があるはずで、その集団であるはずの「JIA」は、本来魅力的に映るはずなんですが。

――「ARCHITECT」について何か思われることはありますでしょうか。

井上ひさしさんが「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことをおもしろく」と書いています。これが一番難しくて、それができればいうことないのですが。ページ数が少なくなっても、そういう誌面構成を心掛けるということでしょうか。

■■■

――新築が減ってリノベーションが増え、建築業自体からも若者が離れて行っているという時代の変化があります。その中でJIAの立ち位置や地域と建築家の関係についてどう思われますか。

最初に「地方創生」について尋ねられましたが、話しはそこに戻ってしまいますね。確かに住宅はプレハブにとって変わられ、地方自治体の諸施設も専門・大規模化して、大手設計事務所の領域になり、企業は、企業の存続時間より短い個人的設計事務所へは、アフターや図面管理も含めて依頼しづらく、設計施工化していますね。つまり一部の若手の住宅設計者以外は、設計行為そのものが魅力的ではなくなっていますね。地方を守れるのは、地方の文化・歴史・風土を知っている人だと思います。その努力をし続けて、「さすが」と思えるようなものを、建築や町づくりで表現してゆくしかないのかもしれません。それが真の「地方創生」につながりますし、地方の若手建築家の意義ある仕事の場となるはずで、それをサポートするのがJIAなのかしら。

――JIAであれば、そういうことを皆さんとお話して、何か次のアクションにつながっていくこともあるかと思います。

失敗談はいっぱいあるのでそれを皆さんにお話することはできます。（成功は少ないですが…笑）ただ余計な失敗はしない方がいいと思います。その部分はサポートできますので、その先の成功は本人の努力次第ですが。

――実はその失敗というのがなかなか聞けないことだと思います。基本的に失敗と言うのは話したくないことですから…ある程度気心の知れたお互いのことを尊重しあえる関係の中で後進の意味も含めて失敗を話して下さるのだと思います。そういう場としてもJIAというのはすごく重要な気がします。本日はありがとうございました。

車戸慎夫さん

※文化と文明、建築家とJIA、言葉と建築、建築と型（式年遷宮・白川郷）、組織とアトリエ、災害、芭蕉と松島と「景色十年、風景百年、風土千年」、また象潟（きさかた）についてもお話いただきましたが、紙面の都合上割愛させていただきました。

［聞き手］
牧ヒデアキ｜
前東海支部会報委員長・
makira DESIGN

2016年度 JIA東海支部・地域会役員構成（敬称略）

■東海支部

［相談役］

飯尾健太郎（静岡）

清水一男（三重）

［顧　問］

小田義彦（愛知）

石田　壽（愛知）

［本部理事］

本部理事・支部長	車戸愼夫（岐阜）
本部理事	鈴木利明（愛知）

［幹　事］

副支部長	久保田英之（愛知・地域会長）
副支部長	大瀧正也（静岡・地域会長）
副支部長	奥野美樹（三重・地域会長）
副支部長	長尾英樹（岐阜・地域会長）
幹事長	矢田義典（愛知）
幹　事	江川静男（静岡）
幹　事	澤村喜久夫（愛知）
幹　事	高嶋繁男（愛知）
幹　事	吉元　学（愛知）
幹　事	山田浩史（岐阜）
幹　事	豊田由紀美（三重）

［監　査］

鳥居久保（静岡）

服部　滋（愛知）

［委員長・評議会議長／補佐］

建築家資格制度認定評議会議長　鈴木　武（静岡）

建築家資格制度実務委員長　藤巻志伸（愛知）

継続職能研修（CPD）評議会議長　豊田由紀美（三重）

フェローシップ委員長	谷村　茂（愛知）
広報委員長	奥野美樹（三重）
会報委員長	中澤賢一（愛知）
建築相談委員長	井村正和（愛知）
東海支部統括委員長	水野豊秋（愛知）
総務委員長	見寺昭彦（愛知）
東海学生卒業設計コンクール特別委員長	吉川法人（愛知）
東海設計競技特別委員長	寺下　浩（岐阜）
東海住宅建築賞特別委員長	吉元　学（愛知）
子どもの建築学校委員長	鈴木賢一（愛知）
災害対策委員長	杉山貞利（静岡）
JIA25年賞審査委員長	谷村　茂（愛知）
幹事長補佐	鈴木慶智（愛知）

［本部委員（東海支部関係分）］※支部長・本部理事は上記

財務・事業管理委員会	小田義彦（愛知）
総務委員会	鳥居久保（静岡）
フェローシップ委員会	谷村　茂（愛知）
広報委員会	奥野美樹（全国広報委員長会議・三重）
選挙管理委員会	服部　滋（愛知）
アクションプラン特別委員会	澤村喜久夫（愛知）
公益事業委員会	鈴木利明（愛知）
本部職能資格制度委員会	植野　收（愛知）
本部資格制度実務委員会	藤巻志伸（愛知）
CPD評議会	豊田由紀美（三重）
JIA災害対策会議	杉山貞利（静岡）
JIA環境会議	柳澤　力（愛知）
JIA建築相談会議	井村正和（愛知）
JIA保存再生会議	原眞佐実（愛知）
JIAまちづくり会議	尾関利勝（愛知）
JIA全国卒業設計コンクール	寺下　浩（岐阜）

■静岡地域会

地域会長	大瀧正也
副地域会長	望月美幸
副地域会長	石橋　剛
運営局長・幹事	江川静男
財政局長・幹事	尾林孝雄
幹事	大橋康孝
幹事	石川正子
幹事	渡辺　隆
監査	花村芳夫
監査	三輪　豊
東部部会代表	高島ゆかり
中部部会代表	清　峰芳
西部部会代表	村松　篤
アドバイザー	田中楯夫
アドバイザー	大石郁子

＜委員長＞

総務委員会	伊久美太助
会員委員会	三保久利
ウォッチング委員会	石川正子
建築セミナー委員会	大橋康孝

建築イベント委員会	石橋　剛
建築相談委員会	鳥居久保
災害対策委員会	杉山貞利
広報委員会	鈴木俊史

■愛知地域会

相談役	大塚一三
相談役	栢本良三
相談役	鋤納忠治
相談役	税田公道
相談役	福田一豊
相談役	森　鉦一
相談役	森口雅文
顧問	石田　壽
顧問	尾関利勝
顧問	鈴木利明
顧問	服部　滋
地域会長	久保田英之
副地域会長	吉元　学(広報室担当)
副地域会長	矢田義典(支部幹事長)
副地域会長	高嶋繁男(研修室・研究会担当)
副地域会長	澤村喜久夫(総務室・地区会担当)
地域会長補佐	田中英彦 (事業室・事業活性化担当)
地域会長補佐	関口啓介 (事業室・事業活性化担当)
直前地域会長	水野豊秋
監　査	小田義彦
監　査	谷村　茂

＜室長・委員長＞

総務室	見寺昭彦
総務委員会	森　哲哉
会員委員会	生津康広
広報室	伊藤彰彦
広報委員会	吉村昭範
ブリテン委員会	中澤賢一
研修室	藤巻志伸
研修委員会	佐藤和正
職能・資格制度委員会	野々川光昭
事業室	西村和哉
事業委員会	高木耕一
建築相談委員会	井村正和
三河地区会	黒野有一郎
住宅研究会	宮坂英司
保存研究会	原眞佐実
法人協力会	四辻一正

■岐阜地域会

地域会長	長尾英樹
副地域会長	山田浩史
幹事(会計)	小塚昭幸
幹事(ホームページ)	寺下　浩
幹事(JIAの窓委員長)	大瀧繁巳
監査	藤井孝一
監査	山田貴明
岐阜卒業設計コンクール	寺下　浩

■三重地域会

相談役	清水一男
地域会長	奥野美樹
副地域会長	豊田由紀美
事務局	芳賀信次(常任幹事)
会計	出口基樹(常任幹事)
監査	中村　久
監査	高橋　徹

＜地区幹事・委員長＞

北勢地区幹事(広報委員長)	阪　竹男
伊賀地区幹事(事業委員会建築文化講演会委員長)	森本雅史
中勢地区幹事(事業委員会建築ウォッチング委員長)	相原宏康
松阪地区幹事(研修委員長)	伊藤達也
伊勢地区幹事(総務副委員長・会員増強担当)	中西修一
総務委員会	西出　章
事業委員会	第1(文化講演会)　森本雅史 第2(ウォッチング)相原宏康
研修委員会	伊藤達也
広報委員会	阪　竹男
CPD委員会	豊田由紀美
研究・社会活動委員会	村林　桂

速報！

第23回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2016 公開1次審査結果

今年で第23回となるJIA東海学生卒業設計コンクールの公開1次審査が、4月16日（土）、金山の名古屋都市センターで開催されました。今回のコンクールは、昨年末、34校に応募要綱を発送し、17校より48作品の応募がありました。審査員長に東京大学大学院教授の千葉学先生、審査員に榎戸正浩氏・川本敦史氏・塩田有紀女史・鈴木利明氏の5人を迎え、一次審査通過10作品を公開審査で選出しました。

審査の様子（千葉学審査委員長）

まず、午前中1時間で審査員のみの審査（非公開）をしていただき、午後に応募者を含めた公開審査を行いました。

今回初めて1次審査を公開審査としました。今までは1次審査を非公開で行ってきましたが、作品に対する質疑などができずじまいで決定され、また、入選外になった学生諸子には、入選外の通知のみが手元に届き、お互いのコミュニケーションがない状態で決定されてきました。

そこで、今年から1次審査を公開とすることで、応募作品への質疑応答ができ、審査員も応募作品の内容を理解することができた上で投票ができたことと思います。

審査で選出された皆さん

審査は審査員長の千葉先生の指導のもとで、各審査員が持ち点10点で投票し、1回目の投票で審査員全員の5点得票した2作品と1回目の投票で得票2点以上得票した作品の中から、残りの8作品を選出しました。以下に、選出されました10作品（受付番号順）を掲載します。

吉川法人｜東海学生卒業設計コンクール特別委員長・
吉川法人＋都市建築デザイン室

- 苔むす柱～佐久島における養殖場の提案～
  福島　大地（名城大学　理工学部　建築学科）
- 心のトポフィリア ～11の環境因子に基づく心療空間の探求～
  山本　雄一（豊田工業高等専門学校　建築学科）
- Origin of Cosmos
  市井　暁（名古屋工業大学　工学部　建築・デザイン工学科）
- 再起の住処
  太田　侑作（名古屋工業大学　工学部　建築・デザイン工学科）
- Bee-Fruit-Hub　多芸輪中みつばち農園拠点計画
  市川　綾音（名古屋大学　工学部　環境土木・建築学科）
- 私の身体を作るもの、誰かの心と集う場所
  ～新たなスーパーマーケットの提案～
  市野　清香（名古屋大学　工学部　環境土木・建築学科）
- マニアの巡礼
  陣　昂太郎（名古屋大学　工学部　環境土木・建築学科）
- 浸る日常　～沈水集落の再編～
  櫻井　貴祥（名古屋工業大学　工学部　建築・デザイン工学科）
- Hyper Muntain Hut ～エベレストベースキャンプ整備計画～
  藤枝　大樹（名古屋大学　工学部　環境土木・建築学科）
- 神島、生業の小景が結う島
  吉田　沙耶香（椙山女学園大学　生活科学部　生活環境デザイン学科）

地域会だより

＜東海支部＞
4/14　支部役員会（新旧）
5/13　支部通常総会
5/28　東海卒業設計2次公開審査会
6/10　支部役員会

＜静岡＞
4/15　4月静岡地域会定例役員会の開催（新旧）
4/25　2016年度通常総会の開催。総会後、記念講演会および懇親会を開催
5/19　5月静岡地域会定例（拡大）役員会の開催

＜愛知＞
4/1　愛知役員会（新旧）・次期事業検討会議
4/26　「地域が建築に求めるもの」
　　プレイベントディスカッション「設計者のチャレンジを問う」
5/14　住宅研究会　住宅の作り方 第2回
　　「建築プロデューサー田岡信樹氏から見る住宅」
5/20　「地域が建築に求めるもの」レクチャー「公共建築とニーズについて」
5/27　JIA愛知・賛助会主催ゴルフコンペ
6/26～27　住宅研究会　全国会議　郡山視察

＜岐阜＞
3/10　平成27年度 JIA岐阜地域会　第7回　役員会（18:30～20:30）
　　場所：ハートスクエアG　小研修室1
4/27　岐阜地域会　通常総会・懇親会開催（17:00～20:00）
　　場所：ホテルグランヴェール岐山
　　総会：5F乗鞍の間　懇親会：5F飛翔の間

＜三重＞
4/7　三重地域会　監査・第1回役員会
4/21　三重地域会　通常総会・講演会・懇親会（津市　東洋軒本店）
　　講演会：本居宣長記念館改修計画などについて
　　（本居宣長記念館館長　吉田悦之氏）
5/19　第2回役員会、第1回例会
6/17　第3回役員会、第2回例会、会員研修会1

地域が
建築に
求めるもの
〈プレイベント〉

建築のプロセスを論じる
対話型レクチャーイベントを行っていきます！

この4月から愛知地域会の広報委員会主催で、「地域が建築に求めるもの」と題して、月に一度のペースで対話型の講演会のようなイベントを行う運びになりました。このイベントは、建築を実際に利用するユーザーの声を設計者がどのように反映できるかということから、地域と公共性のあり方を考える「開かれた場」をつくることを目指します。実際に、地域のまちづくりを牽引する有識者などをお呼びして、ディスカッションを行うことで、広く設計者が情報や思想を共有し、まちづくりにかかわる人々とJIAをつなぐ活動です。

また、コンペやプロポーザルの作成／実施段階から設計段階、そして完成後の運営段階などの一連のプロセスを通して考えることからみえる建築の問題点や可能性を議論することが目的でもあります。

そして、去る4月26日（火）に口火を切るプレイベントを行うことができました。まず、はじめに設計者としてプレゼンターを務めてくださった栗原健太郎さん（studio velocity）が登壇し、愛知トリエンナーレでの展示や美浜町営河和団地、そして、愛知産業大学での作品について30分程度の発表をしていただきました。続いて鈴木悟史さん（CAn）が「風の街みやびら」の仕事を中心に発表。その後、ゲストの桃原勇二さん（日進市役所）、笠井尚先生（中部大学教授）、と当日参加の特別ゲスト中井孝幸先生（愛知工業大学教授）を交えて、ディスカッションを行いました。

議論は、①公共建築のユーザーとのコミュニケーションはどうあるべきか？②設計者が想定していない建築の使われ方とは？

などといったトピックを中心にすすみました。①については、やはりワークショップを開いたりすることの有用性が挙がりましたが、学校建築などでも生徒が卒業生していってしまって、実際に使う人とワークショップをする人が違うことで、実感が持ちづらくなったりもするけれども、ワークショップを形式的なものにしないために設計者側の熱意が重要であること、あるいは、ワークショップをプロポーザル以前に行う試みによって発注者と設計者の意向のズレが少なくなる仕組みがありうるのではないかという新しい可能性が論じられたりしました。

筆者にとって印象的だったのは、②について、「想定外の使われ方」のために設計者がすべき最良の方法は、使い方を徹底的に考えた上で想定できうる最大限のつくり込みをすることだ、という逆説的とも言える中井先生のコメントで、その背景には、やはり不特定多数の利用者が通う建築には、より具体的な使い方のイメージがあるべきで、それを建築に反映することが設計者の責務であり、そのために実績要件があるのだ、という意見でした。若手の設計者にとっては、実績要件があること自体にはがゆさを感じるが、さらに、経験値のないなかで具体的な利用方法のビジョンを提示するのが難しいことであることにかわりはないですが、問題点がフォーカスされることで、今後の課題として次に活かせる有意義な議論になったのではないか思います。

発表者やゲストも含めて30名程度のささやかなプレイベントでしたが、会場からも熱意のある質問やコメントがありました。そのなかにも「公共施設をつくるプロセス自体が公共的なものになりうるから、それを大事にしていきたい。」（米澤隆氏）など、ワークショップ以外のコミュニケーションの方法がうかがえる興味深い意見もいただき、プレイベントは終わりを迎えました。

今後も毎月イベントを行っていく予定です。次回は、5月20日（金）に「プロポーザルのまえ、公共建築のあと」というテーマで行います。

吉村昭範｜D.I.G Architects

二人のプレゼンターがスライドを使って発表。その後ゲストを交えてディスカッションした

会場の様子。参加者からも質問や熱意のあるコメントが飛んだ

旅の大学「ピレネーを越えてⅡ」／カルカソンヌ、アンドラ公国、カタルニアのロマネスク

アネウ谷、ブルグの村（高橋敏郎 撮影）

2月末、旅の大学「ピレネーを越えてⅡ」の極めつけマニアックツアーは14名の参加で始まった。

丸3年の準備を経て企画したが、カタルニア奥地の情報は極めて乏しく、ネット上でたまに見つけても建築の話はほとんどなく観光情報のみ、現地のホームページを探りようやく行程を組んだ。

今回は少人数ゆえ添乗員もなし、現地ガイドと私が連れ歩くことになった。2度の雪中のピレネー越えはさすがに緊張、凍結したホテル前の路面で転倒し怪我人2名（1名は重症）が出るなど、いくつかのトラブルに見舞われたが何とか乗り切り帰着した。

イスラムに席巻されなかった当地の、ロマネスク教会堂の素朴で力強い造形に感銘を受け、祈り空間の素形を見た思いだ。カルドナ大聖堂の地下納骨堂やアネウ谷ブルグの教会廃墟などには古くローマの影響と同時に、フランスからイベリア半島にかけてのガリア人（混血し消えていったケルト人）の技術も明らかに見ることができ、彼らの行方が見えた。暗黒時代にあって建築を再構築する素朴な思いが、構築技術へと進化する様子が如実に見てとれ、モダンも含め昨今の建築の薄っぺらなファッション性など足元にも及ばない感動を呼び起こしている。ここにこそギーディオンの言う「時空間」があると断言できる。

来年は「スコットランドから始まる／イギリス縦断・建築史の旅（別名、イギリスはおいしい!）」を企画中。ご興味のある方はコンタクトを下されば情報を送ります。

髙橋敏郎｜愛知淑徳大学

■「ロマネスクの、聖堂と塔のルーツ」

3月初旬、雪の残るピレネーのアラン谷やボイ谷を中心に、25のロマネスク教会を行脚しました。教会は聖堂と塔と墓地が置かれ、村人の日々の生活を支える山寺です。かつて、ヨーロッパが紀元1000年の終末思想から解放された11～12世紀には地域の教会が盛んに建てられました。聖堂と塔をつぶさに見ると、つくるべき動機が異なるようでした。

ボイ谷タウルのサン・クリメント教会（鈴木幸治 撮影）

たとえば、ヴァルの聖母教会は洞窟と石積みの聖堂で、ロマネスク教会の原点です。分厚い石積みの聖堂は洞窟的空間の石であり、バシリカは平面計画や構造といった実用的要求によるものです。禁欲的な修道院と異なり、ピレネーの教会の内部には素朴なイエスの物語の絵やキリストの彫刻があり、村人の生活に寄り添うものです。

ところが塔の建設には多大なエネルギーを費やしているにもかかわらず、納得できる実用上の理由が見当たりません。タウルのサン・クリメント聖堂の美しい鐘楼を登りました。しかし塔は構築物そのもので、建築空間を確保していません。塔は高く美しく、鐘楼以外の目的が確かに他にあるのです。それは実用では語れない人の心が求めるもので、儀式や慣習にもある、人間の精神の高みへの衝動に違いありません。

鈴木幸治｜ナウハウス

■「アンドラ」

アンドラ、サンタ・コロマ教会（服部　滋 撮影）

アンドラという国の存在を知ったのは、地図好きの小学生のときでした。行ってみたいなと思ったのは20年ぐらい前。数年前、織田裕二のアマルフィの映画の続編で舞台になり、ほとんど映画館に足を運ばない私がアンドラ見たさに足を運んだ。フランスとスペイン国境のピレネーにあり、タックスヘイブンのため両国から客が押し寄せる買い物天国だというぐらいしか情報のない国へやっと行けることになりました。

フランスからトンネルを抜けた国境は一面銀世界。そこから谷沿いに数百m下る道路沿いの集落には、両側に10階建て近くのホテルやコンドミニアムが林立する一大リゾートでした。高級感漂うアルプスとは違い、庶民的なリゾートとしてこの20年ぐらい大発展を遂げているようです。標高1409mの首都アンドラ・ラ・ベリャで一泊し、周辺部にあるサンタコロマをはじめ、世界遺産となっているロマネスク教会を巡りました。次の日氷点下のまちを後に、大ショッピング施設のあるスペイン国境を抜け、麓のまちラ・セウ・ドゥルジェイ（標高690m）に着いたときは20℃を超え花咲く世界でした。

服部　滋｜三共建築設計事務所

―東日本大震災復興建築ツアー in みやぎ―に参加してきました

ワーク○キューブ　吉元　学

■みやぎで見てきたこと

2月25日の夜に名古屋の名鉄バスセンターから入社1年目のスタッフと生まれて初めて深夜バスに乗り込みました。26日の早朝に仙台駅到着。3時間ほど喫茶店で時間を潰すという学生のような行動を取った後、仙台駅前東口からバスツアーがスタートしました。まずは石巻市の日和山に行きました。ここは石巻の市街地が一望に望める山です。少しずつ復興している石巻の中心部で食事をした後、続いて女川駅へ。車中より大川小学校を見た後、石巻市北上町のにっこり北団地の造成地を見学して一日目が終わりました。夜はみやぎの地酒と牛タンをこれでもかと食べました。27日は朝8時にバスで仙台のホテルをスタートです。多賀城市の桜木地区災害公営住宅と七ヶ浜町の町営住宅を見学。昼食のあとは岩沼市玉浦西防災集団移転の住宅、海岸近くの千年希望の丘・防潮堤を見て最後に名取市の閖上（ゆりあげ）朝市でお話を聞いた後、仙台駅に戻りました。夜9時の深夜バスに乗り、翌28日の朝6時半に名古屋の栄に到着しました。とにかくバスに乗り続けた1泊4日間でした。震災直後とは違い、一部しか災害の爪痕が残っていない新品の「まち」や建物を見たことがなかなか実感できず、どう消化してよいやら考えこんでしまいました。

■名古屋の現在

「名古屋スリバチ学会」の街歩きに参加すると古い「まち」にはいろいろな時間が堆積していることを感じます。このことが「まち」に愛着を持ったり、安らぎを感じたりすることにつながるのだと思います。建物が建て替わっていても坂道や道の曲がり具合などが、時を刻んでいることを感じさせてくれます。女川駅前のように道路も建築物もすっかり新しくなってしまうと、これから記憶を刻んでいくのに長い時間が掛かるだろうと思います。やはり「まち」とは現在―過去―未来を感じさせてくれることが大切だと思います。これは歴史的な建造物だけを残せば良いというものではないでしょう。映画「もしも建物が話したら」を名古屋で見ました。パリの「まち」のポンピドー・センターが出てきましたが、古いパリの「まち」に新しいガラス張りのビルが建つことで、より際立って時間を感じさせてくれます。「まち」で時間を感じる方法はいろいろありそうです。これは被災地だけではなく、これからの時代の建築をつくるときに考えるべき重要な課題ではないでしょうか。

■フクシマの未来

6月26日～27日には福島県の郡山市で全国住宅部会会議と見学会が企画されています。一昨年行ったフクシマの双葉町では「まち」は歴史を刻んでいるのに人が1人もいないという光景を見ました。人それぞれ感じることはたくさんあるでしょう。ぜひ皆さまご参加ください。そして宮城地域会の皆さまお世話になりました。

石巻市の日和山からの眺めです。この山に登って助かった方が大勢いたそうです。
海の近くは公園として整備され、人は住めなくなるそうです。多くの重機やダンプカーの姿が印象的です

女川駅前です。温泉温浴施設と一緒になった駅舎は世界的建築家坂茂氏の設計です。
山側に200メートル移動し、7～9メートル土地が嵩上げされています。
建物どころか道の記憶も消し去られています。初めて訪れたのに昔の記憶が無くなった感覚に襲われました

石巻市北上町の北上にっこり団地には仮設住宅がまだまだ残っています。復興はあと何年掛かるのでしょうか?

多賀城市の桜木地区災害公営住宅です。
海が見えない土地で、人の高さまで津波が来ました。
住戸は2階から上にあります。
「みんなのリビング」という部屋がありましたが、
使い方はまだ話し合っているそうです。
「みんなのもの」は「だれのものでもない」と思います

七ヶ浜町の復興住宅です。
共用の屋外通路からアルコーブを通って
住戸に入ります。
建築家がさまざまな試みをしています

岩沼市の防潮堤です。
思ったより高くはありませんでした

ゆりあげ朝市の近くに残された建物です。
震災遺構として保存されるのでしょうか

東海支部役員会報告

支部会費の徴収をせずに今年度は黒字になりました。詰めるところは詰めきった感ですが、奮発して複数年度事業に取り組むには心細いと、皆さんも感じておられると思います。例えば、ラージファーム各社から新たに正会員を2～3名増やせば、東海で30余名は確実に増え、法人協力会員も増加すると思われます。3/30の六鹿新会長を迎えての懇話会で、JIA創立時のメンバーが組織の代表から退き、ラージファーム後継者のJIAに対する想いが希薄であると言われていましたが、そこはぜひ、うまく継承していただけるように働きかけいただきたいと願います。

今回の役員会報告の感想ですが、JIA活動を通じて会員のさまざまな意見が活発に議論されることは素晴らしいと感じています。しかし、本部からの話として聞こえてくる、どこへ向かっているのか定まっていないような対応・柔軟性は、混乱を招くだけで、対外的に説明しづらい複雑な組織になりそうです。

JIAは会員種別が多様化し、正会員資格がない方でも会員としてJIA活動に参加できるようになった一方で、正会員は「全員登録建築家」であることが明確化されましたが、いまだ正会員の過半にもいたっていない状況です。“全員”ということが、かけ声だけで現状容認されるのも程々にすべきと思います。ましてや、正会員資格がない登録建築家にもなれない方々を（例：プロフェッサーアーキテクト）今後、正会員扱いすることになるならば、会としてのモラルが問われます。CPD単位についてもJAEICで認定されないJIA活動などの自主研修などを含めるよう見直す意見も腑に落ちません。今回の監査意見にもあるように、本部に対して不安を感じるとともに大事なことを支部・地域会で検討・議論する猶予もなく決めないように注目していきたいと思います。

高嶋繁男｜黒川建築事務所

日　時：2016年4月14日（木）16:00～18:00
場　所：昭和ビル5階　JIA東海支部会議室
出席者：支部長、本部理事2名、幹事10名、監査2名、オブザーバー 11名

1.支部長挨拶

来月には総会があり、総会資料も整ってきました。あと1カ月ほどになりますが、よろしくお願いします。

2.報告事項

（1）本部報告

①本部職能・資格制度／建築家資格制度 合同実務委員会(3/30)（植野）
②本部CPD評議会（3/23）
③第31回 フェローシップ委員会（4/7）（谷村）
④本部総務委員会（4/13）（鳥居）

（2）支部報告

①休会届：正会員「清水孝昭(A)」（水野）
②東海支部選挙管理委員会（4/11）（久保田）
岐阜地域会　山田 浩史を当選人とする。
③第23回JIA東海学生卒業設計コンクール2016（4/7）（吉川）
・4/16一次審査（今回初めて公開審査）、5/28最終審査
・48作品17校から応募（昨年45作品9校から応募）
・5/24から6/5まで入選作展示会

（3）各地域会からの報告（各地域会長）

静岡地域会:総会（4/25）、愛知地域会:久保田新会長を励ます会（4/15）・久保田会長による新規事業で特別委員会設立予定（4/26）、岐阜地域会：なし、三重地域会：総会（4/24）

3.その他

1.審議事項

①三重地域会規則改定案（奥野）　承認
・三重地域会役員会（4/7）にて承認済み
・改定内容　①顧問、相談役を定める、②表現：津→中勢　③地域会役員選出規則
→地域会役員等運営細則、（通称はJIA三重のまま）
②入会申込　正会員「山本覚康（三重）」（中西）　承認
③入会申込　法人協力会員「新東株式会社（愛知）」（水野）　承認
④事業報告「第3回JIA東海住宅建築賞2015」（吉元）承認
・管理費（懇親会費）も含めて22万余の黒字となった。次年度に持ち越せないが、委員会交通費、応募作品によっては現地審査旅費が変わるので、ご配慮いただきたい。（吉元）
・総会議案書では管理費を除いて示されるので、38万余の黒字となる。（久保田）

2.協議事項

①東海支部 2016年度通常総会議案書について（久保田）
・2015年度決算は収入支出とも、予算より少ない。15万取崩しもせず、40万余の黒字となる。ただし予算で考慮しなかった家賃減額、ARCHITECT頁数削減による80万余の縮減効果を含めると黒字幅が小さい。（ARCHITECT広告収入60万減が要因）（久保田）
・2016年度予算1800万弱の収入支出で4万余の黒字で計画（矢田）

3.その他

①最終会計報告「子どもの建築学校」（久保田）
・本部の助成金30万と愛知の負担で支部は負担なし

4.監査意見

今日が最後の監査意見となります。支部の役員会では細部まで協議されているが、本部の方に不安を感じる。六鹿新会長のもとでのJIAの体制に不安を感じました。（山田）

登録有形文化財

旧大倉別荘離れ＋表門(現･大倉公園休憩棟＋茅葺門)

離れ外観（昭和50年）瓦葺き

離れ外観（現在・休憩棟）鋼板葺き

上｜黒漆喰表門 下｜現在黒漆喰表門

■紹介者コメント

大倉公園は、大正8（1919）年、日本陶器㈱（現･㈱ノリタケカンパニー）初代社長の大倉和親氏により建てられた「大倉別荘」を元とし、昭和20（1945）年から30年間、加治慶之助㈱名機製作所）初代社長が住み継いだ。その後大府市が購入、福祉会館、歴史民俗資料館、旧図書館を持つ「大倉公園」として整備した。

和親は東洋陶器、日本碍子（現･TOTO、日本ガイシ）、日本特殊陶業の他、父孫兵衛と共に夢の会社「大倉陶園」も設立し、日本窯業の父と呼ばれた。慶応出身で、米国滞在時、広い視野と見識を培ったと思われる。当初この広大な丘陵地を3万本の桃畑としたが、桃は連作出来ず、一部を昭和9（1934）年「大府桃山園芸住宅地」として道脇に桜を植え分譲、後々私の住む処となった。

良い環境をつくり残して下さった大倉様、加治様には深く感謝している。

大正11（1922）年頃、眺望の良い丘の上に客人をもてなす【離れ】が建てられた。大正期の名残を留め、近代の大府を物語る建物として評価を受けた。東南に広く開けた庭に向けて2室1組をL字形に配置し、交点奥に配膳室を置く。配膳室からの廊下を裏のサービス動線、庭に面する内縁を表の客動線としている。手前2室は掃出し窓、本長押の「真の間」、奥2室は腰窓、磨丸太長押の「行の間」とし数寄屋風意匠としている。洋間地下には防空壕がある。

「表門」は元々両脇に袖部屋を持つ茅葺長屋門で、外壁は上部が黒漆喰塗、下部はモルタル塗および杉板貼りだったが、昭和54（1979）年現在地に移築された際、袖部屋が撤去され、茅葺門となった。しかしこれらの建物も庭も後にかなり残念な改変･改修がなされている。

『一度いりゃあせ／尾張の大府／
春の桃山／桜山』（大府ばやし）

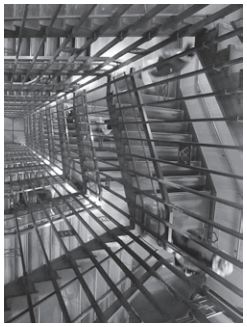
名　称：旧大倉和親別荘離れ・表門
所在地：大府市桃山町5-77・74
アクセス：JR大府駅より徒歩9分
建築年：大正11（1922）年頃
登録番号：第23−0426・0427号
構造規模：木造平屋建・入母屋、
当初瓦葺き、現在鋼板葺き
敷地面積：約17,000m²（当初約6ha）

三井富雄｜
モモアーキテクツ ネットワーク

データ発掘（お気に入りの歴史的環境調査）

モダニズム建築としての名古屋城天守閣

正面外観



二重らせん階段

所在地：名古屋市中区本丸1−1
築城主：徳川家康→名古屋市
城郭構造：梯郭式平城
天守構造：石垣積＋ケーソン基礎、
連結式層塔型
5層5階地下1階
築城年：慶長14（1609）年　非現存
1959年再建
（SRC造・外観復元）
改修者：名古屋城再建委員会
設計者：城戸　久
施工者：間組

■発掘者コメント

昭和20（1945）年、焼失した天守閣の姿は名古屋の人々の心を打ち砕きました。焦土から起ちあがろうという人々にとって「戦災などで2度と失うことのない技術で蘇らせたい」という気持ちが切実でありました。多くの人々の寄付を集め、現存する鉄骨鉄筋コンクリート造の天守閣は昭和34（1959）年に完成しましたが、その設計を担当されたのが城戸久氏(1908-79年）でした。彼は建築の歴史に関する専門家で名古屋工業大学の教授を務められ、多くの城郭建築の研究と再建に携われました。焼失前の名古屋城の図面や資料が多く残っていた事は、専門の城戸氏は恐らく重々承知の上で天守閣の設計をされました。ただ再現するのではなく人々が天守閣を楽しめるようエレベーターや水廻りも備えた現代建築にしました。動線を円滑にするため二重らせんの階段を建物の中心部に備え、外観も窓などのデザインを意図的に現代的な四角の窓にしたのです。なぜそう設計したかは城戸氏の正しい歴史観にあります。歴史の歪曲とか誤解が生まれることを避けるために、意図的に原型と違うデザインを用いています。失われた名古屋城の記憶を永久に蘇らせたいという市民の気持ちがこもって再建されているこの建物こそを後世に遺したいと切に願っています。二度と不幸な戦いの過ちを繰り返さないようにとの、戦中戦後を生き亡くなられた多くの人々の気持ちを永遠に忘れないために……。

谷口　元｜
名古屋大学　名誉教授

編集後記

●今年度から2年間、会報・ブリテン委員長を務めさせていただくことになりました。これまで委員会に所属した経験もなく、いきなりの委員長職ではありますが、精いっぱい誌面に向き合い、いただいた役割を全うしたいと思いますのでよろしくお願いします。さて、車戸慎夫 新東海支部長がインタビューの中で「ARCHITECT」について、井上ひさしさんの言葉を引用され、「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことをおもしろく」できれば言うことはなく、そういう誌面構成を心掛けるべき、とお話しされています。またJIAの意義については、同じ会に所属する先達として、失敗談を含めてその豊富な経験を伝えることができるところでは、とのことでした。本誌も、世代を超えた会員相互のコミュニケーションを促すプラットフォームとして、何より編集に携わる私達、委員会全員が構想企画段階から楽みながら、より興味深い企画を練っていきたいと思います。（中澤 賢一）

●小さな動きが面白い。三重県津市に生まれた小さな民間劇場（テアトル・ドゥ・ベルヴィル）や、建築のプロセスを論じる小さな集まり。このような小さな動きにより、地域や業界が活性化されると、さまざまな分野に多様な価値観が生まれて楽しくなる。私自身はSNS音痴だが、このような動きが広く浸透していくスピードは加速度的に上がっている。いつの間にか、主流になっていることも多い。小さな動きが面白く感じられるのは、その時代における主流との「ズレ感」だと思う。ここでいう主流とは、既成概念と読み替えることもできる。反主流的なズレ感は、当事者にとっては理解が得られないというジレンマが伴うことも多い。学生の頃にあこがれた建築家の活躍は、世界を大きく前に進める動きに見えた。しかし、建築家は反骨精神のある開拓者であり、社会的にはマイノリティに属する生き物だ。『ARCHITECT』が、そんな小さな動きの芽吹きを後押しするメディアであり続けてほしいと願う。（宇野　享）

ARCHITECT
第333号
発　行　日　2016.6.1（毎月1回発行）
定　　価　380円（税込み）
発行責任者　車戸慎夫
編集責任者　中澤賢一
編　　集　東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部
名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703
TEL(052)971-7479　FAX 951-3130
発　行　所　(公社)日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26　昭和ビル
TEL(052)263-4636　FAX 251-8495
E-Mail：shibu@jia-tokai.org
http://www.jia-tokai.org/